

多景島は、彦根市八坂町の沖合約5⁺の琵琶湖に位置する小島です。最高所の標高が約101⁺、長辺約200⁺、最大幅約70⁺、周囲約600⁺で、島の規模としては神島(近江八幡市)、竹生島(長浜市)に次ぐ大きさです。

この島は、「信長公記」に「竹嶋とて鐵々と鐵えたる巖あり」と記されるように、水中から幾本もの柱が突き出し、たよつな形状をした花崗岩と流紋岩により形成された、岩だらけの島です。

島の名称は、篠竹が繁ることから竹島や武島とも呼ばれ、あるいは見る方向によって島の形が異なることから多景島と呼称されるようになったとされています。

島内には、江戸時代の明暦年間(1655~1658)

の草創と伝えられる日蓮宗見塔寺、彦根藩三代藩主井伊直澄が江戸で没した先代井伊直孝の供養のために寛文元年(1661)に建立した七重石塔などの石塔群、大正13年(1924)に建立された誓の御柱などを見ることができます。

さて、この島では、棧橋の工事に伴う潜水作業中に水面下3~5⁺の湖底から遺物が発見されました。そのため、昭和57~58年にかけて潜水による発掘調査が実施されました。その結果、七層からなる遺物包含層と二面の生活面が確認されました。その内容は、

多景島と湖底遺跡

琵琶湖の小島、多景島。古代から信仰の対象だったとみられる



第一~三層から近現代、第四層から中世、第五層から平安時代、第六~七層から少量ですが縄文~古墳時代の遺物、そして第五層では印跡が検出されました。

潜水調査の結果から、この島には、既に縄文時代から人が往来していたことが判りました。また、奈良時代以降は、出土する遺物の量が徐々に増加する傾向があり、煮炊きに使われた土器が確認されることから、この頃からこの島が生活の場であったこと、平安時代の遺物は都との繋がりを示すものが多く、小型の銅鏡や多量の燈明皿が含まれることから、国レベルでの祭祀が行われた可能性が高いことも明らかとなりました。

見塔寺の縁起は江戸時代に成立したのですが、多景島

は往古より護念経土の霊場と記されています。現在の多景島には江戸時代以前の遺構は見ることができませんが、湖底から見つかった遺物から、この島は既に古代から信仰の対象であったことが明らかとなりました。その要因は、島の位置や形状が、琵琶湖を航行する際には目印となることに、荒天の際には寄港することができたためと考えられます。

現在の多景島は、竹生島のような厚い信仰の対象とはなっていないませんが、湖底から見つかった遺物は、自然に左右される古代の湖上交通においては、この島が航海の安全を祈願するための神宿る島として、竹生島よりも厚く信仰されていたことを物語るのではないのでしょうか。(財団法人滋賀県文化財保護協会 藤崎高志)

縄文時代から人が往来

前回同様で比叡山横山の恵心院としたのは、「比叡山横川」でした。